



教職・学芸員

春日先生 高柳町の取り組みがベースにあります。昭和六十年（一九八五年）の国勢調査で高柳町の人口が前回調査に比べ一七・八%減少しました。新潟県内の市町村で人口減少率ワースト1。町内で新築の家が年に一軒しか建たない年もありましたので、人口が減少していることはみんな肌で感じていたのです。当時、

この一〇年間で二〇代から四〇代の六人が移住してくれましたので、若い人たちと一緒に萩ノ島集落の再生に取り組んでいます。

——萩ノ島集落をはじめ地域再生に取り組むようになつたきっかけを教えていただけますでしょうか。

私は役場総務課に勤務しており、町長を先頭に農業の基盤整備や産業育成に力を入れて取り組んでいる最中でしたので、ものすごくショックを受けました。そんな状況の中で、高柳町の若い人たちが「自分たちはこれから高柳町に住めなくなるかもしれない」と危機感を強く持つようになりました。ラッキーだったのは、町内の門出和紙工房さんが西武百貨店池袋店に手漉き和紙を納めていたのが縁で、西武池袋店で開催された「日本の一〇一村展」という全国の自治体が集まる「ふるさとの博覧会」に出てみないかと高柳町に白羽の矢が立つのです。新潟県では高柳町だけです。ただ、売るものがなく、商品化された特産品がなかったわけです。行政、商工会、森林組合、農協などで話し合った結果、「東京へ行つても、売るモノがないし、大恥をかくかもしれない。今回は見送つたほうがいい」という結論になりました。ところが当時の商工会の平澤青年部長と地域おこしグループ「水曜会」の小林代表が「たとえ恥をかいてもいい。なんとか若手だけでも頑張って出展してみよう」と立ち上がり、それを周囲が応援するような形で参加することになったのです。行政、農協、森林組合、商工会、老人クラブ、婦人会、地域づくりの会、

特集

地方創生のいま、地域を元気に! ~地域の暮らしを支える仕組みと人づくり~

春日俊雄・新潟産業大学附属柏崎研究所所長に聞く

地域の維持・持続に繋がる「小さな観光づくり」 地域情報の結節点として郵便局の機能に期待

聞き手 一般社団法人 通信研究会 事務局長 島崎忠宏

春日先生 本学は「地域に学び、地域をおこす」を教育スローガンに掲げて「地域社会や企業を主体的に力強く支える人材の育成」をミッションとしています。

特徴的なカリキュラムとして、地域実践教育プログラムがあります。全学生を対象に一、二年次では「地域理解ゼミナール」において、フィールドワークを取り入れながら六分野（地域経済政策、地域企業経営、地域観光・スポーツ、地域農業・六次産業、地域文化、コミュニティ・まちづくり）を柱に、地域の産業・文化への理解を深めてもらい、三・四年次にはより専門的な「地域活性ゼミナール」へとステップアップさせます。理論と実践を連動させた学びが大きな特徴です。

本学は経済学部だけの小さな大学ですが、その特徴を生かして学生一人ひとりの可能性を引き出す、きめ細かい丁寧な教育と学生生

域づくりのオンライン大学を目指す」ことを掲げておられ、地域実践教育に実績を上げている大学として評価されています。まずは、新潟産業大学が目指す教育方針をお聞かせください。

——新潟産業大学の特色として「人づくりと地域づくりのオンライン大学を目指す」ことを掲げておられ、地域実践教育に実績を上げている大学として評価されています。まずは、新潟産業大学が目指す教育方針をお聞かせください。

——先生は大阪府松原市や新潟県柏崎市など自治体で勤務した後、大学で教員の道に進みました。どのようなきっかけだったのでしょうか。

春日先生 柏崎市役所の観光交流課長をしていました時に、新潟産業大学から「地域観光の講義を一五回受け持つてもらえないだろうか」とお声がけをいただきました。ありがたいお話をうながすのですが、観光交流課は夏場が忙しく、時間が確保できないのでお断りしたのです。その後、柏崎市役所を退職し、改めて学長から「非常勤講師をしてもらえないが?」とお誘いを受け、現在、観光分野の専任教員のほか本学の柏崎研究所所長等を務めています。

市役所を退職後は、地元の集落に活動拠点を置いて、自治振興会や萩ノ島ふるさと村組合等による都市との交流、農業振興、集落の活性化に取り組んでいます。萩ノ島集落は高柳町の中心部から三・五キロほど山あいにある「環状集落」です。かやぶきの家屋が六棟、かやぶきの宿が二棟、その他、集落セントナーがあります。人口が減る一方だつたこの集落に、



プロジェクトを開催しました。それが「じょんのび村(※)」と「こども自然王国」「かやぶきの里」として具現化し、交流・観光を手法とする地域づくりの取り組みとなっていました。

※じょんのび(寿命延び)＝新潟地方の方言。いい働きをした後に授かる充実感のこと。

——先生は地域の維持・持続につながる「小さな観光づくり」に力を入れておられますか、いつ頃から取り組みを始められたのでしょうか。

春日先生 平成二十五年(二〇一三年)八月、萩ノ島ふるさと村組合創立二十周年記念事業(新たな道一〇年を拓く)において取り組みを始めました。一つは、都市・農村交流を集落の持続的振興にしっかりと繋げること。もう一つは、

「特別な存在感」が生まれることによって来訪者がリピートし、ファンに、さらにコアのファンになり、最終的には支援者や応援者となります。事業のブランド化に繋がるわけです。

——なぜ、「小さな観光」が地域の維持・持続に繋がるのでしょうか。

春日先生 地域内で「小さな観光」の取り組みが行われることによって、人や小さな経済の新たな流れが起きて、多様な出会いや交流が生まれ、地域に来訪者を引きつける力(魅せる力)が強くなります。

地域内の「小さな観光」に関わる事業やサービスが評価されることにより、事業者のみなさま、その地域住民も含めた総体の自信と誇りの再生に繋がります。若い人たちの生き生きとした仕事ぶりやサービスなど新たなビジネスは地域の側から見てもかつて良好な魅力的です。来訪者は、単なる消費者ではなく、事業者や地域との共創的な繋がり(共感→特別な存在→リピート→ファン→コアのファン→支援者)へ深化していくのです。

総じて言えば、「小さな観光」によって「繋がることの嬉しさ」「人生の喜び、生きがい」「持



紅葉とかやぶきの宿

不特定多数の交流から「萩ノ島大好きファン」との「共に支え合う共生・連携」を中心に据えた交流ランクアップすることです。

その背景には、交流人口数に重きが置かれ、全国的に不特定多数の交流拡大によって交流密度が薄くなり、地域への興味・関心・繋がりも弱くなっています。そして、他地域との価格・品質・サービスの競争に引き込まれていき、「人・資金・大量生産・ノウハウの弱い地域」が淘汰されていった経緯がありました。共感をベースにして競争をしない「集落のポジション取り」を行った上で、来訪者・受け入れ側が一緒になって交流効果を生み出していく、「小さな観光」が大事になつて来たのです。

——「小さな観光」とは具体的にどのようなものなのでしょうか。

春日先生 小さな観光のあるべき姿としては、事業者が自らの暮らしをベースに、家業や新たな生業を興して、地域を外に開き、地域住民に加えて県内外からも来訪者を迎える、規模の小さな観光・交流事業です。具体的には、小規模な旅館・ホテル、カフェ&レストラン、食堂、割烹・小料理屋、蕎麦屋、パン屋、酒蔵

統的なほどほどの経済」を生み出すことができます。

——今後のふるさとの地域づくりの役割と手について、先生のお考えをお聞かせください。

春日先生 地域づくりの役割は、大きく二つあると思っています。一つは、ふるさとで生きる価値観をいかにして皆で創るかということ。漠然と住むのではなく、自分がこの地に住む意味を含めて、価値観をしっかりと持てているかどうかがとても大事です。そして、外に開いていくことはとても大事なことだと思っています。

もう一つは、ふるさと地域の内外で共に支え合うことです。市場経済が暴走したり、偏りすることに対する対応で、自分たちがストレスをあまり受けないように、お互いに共感する人と向き合つて暮らしていく。お互いに支え合いながら日々の充足感や幸せ感を得たりしていくことが大事だと思っています。それに付随するのですが、地域社会のシステムは、経済の裏打ちができるないといと長続きはしません。経済の裏打ち、つまりお金とネットワークが必要です。経済活動は今まで以上に大変になります。これから行政は財政的にますます厳しくなります。良い事業だけれども予算を確保できないというケースも出てくるでしょう。市場経済では山の中や小さな地域は条件的に不利です。ですから、市場経済から少し距離を取ったポジション取りを行つて、お互いに共感する新たな土俵をつくる。市場

等で自分たちの生業を通して地域を外に開き、市民の皆さんに加えて県内外から来訪者を迎えています。

「小さな観光」の強みは、売り上げの七割程度を地域住民が支え、残りの三割程度を県内外の来訪者が消費することです。良いお店や事業者を地域が支える。そして、県内外からの来訪で事業者に誇りが生まれます。また、地域住民が支えることで、地域内との関係性が強くなります。地域の日常をベースにしていることから、交流による地域へのストレスが少なく、来訪者及び事業者・地域の双方が幸せになります。

経済の中で強いストレスに晒されるよりも、お互いが幸せになるための土俵づくりや支え合いの活動にエネルギーを回すほうがはるかに人間的なのではないでしょうか。そこそこの儲けやほどほどの稼ぎが良いのです。

一方、担い手づくりですが、時代的に若い人たちの考え方や生き方が多様化しています。地方や農村部に共感する若者との連携が重要です。地域の内外を問わず、若者同士は早く繋がります。様々な人たちとコラボレーションし、掛け算的に活動していきます。こうした若者と繋がるには、地域の考え方、自分たちの有り様など地道な情報発信が不可欠です。

これからふるさとづくりには、地域内外の交流や連携、支え合いが求められることから「内の人と外の人の協働活動」が一つのカタチになつていくのではないかと考えています。もう一つは、今盛んに言われている関係人口の創出や地域の応援団づくりが大事です。

春日先生 地域で作る“モノ”は一時的にたくさ

ん売れても、継続的に売れなければ意味がありません。荻ノ島ふるさと村組合と社会福祉法人ル・プリ（横浜市）とで「共に支え合う連携協定」を締結し、農福連携を進めています。荻ノ島集落で作る米の約半分、一二〇～一五トンを障がい者のお米屋さんに納め、横浜市内の福祉施設やグループホームで食べてもらうほか市民の皆さんにも販売して貰っています。

障がいの方から「美味しいお米をつくってください」と背中を押してもらい、荻ノ島集落の人たちも障がいの方の事業が成り立つように美味しい米作りに励み、お互いに支え合つて活動しています。

——最後になりますが、郵便局の果たす役割、期待についてお聞かせください。

春日先生 今の流れで行くと金融機関はほとんど地域から撤退してしまいます。郵便局は全國津々浦々にネットワークを有し、生活に欠

かせない物流や金融決済機能を担われていることは、心強しい、有り難いです。地域にとつて郵便局の価値はますます高まって行くでしょう。郵便局には地域インフオーメーション

ンの結節点になつてほしいと期待しています。

今まで行政が担つていた地域情報の一端を郵便局に担つていただき、地域外の人たちも郵便局に行くとその地域の情報が得られます。そんな機能を担つていただければと思います。さらに、郵便局のフロアの一角を地域サロンにして、地域の人たちが集い、椅子に腰かけながら談話できるようなことができればいいですね。

繰り返しますが、郵便局をとても頼りにしています。安価な値段で、全国津々浦々に郵便物を配達していただける。全国どこからでも届けていただける。生活インフラとしての役割はますます大事になると思っています。

略歴

春日俊雄（かすが・としお）

一九五一年新潟県柏崎市（旧刈羽郡高柳町）生まれ。近畿大学農学部卒業。観光カリスマ、地域活性化伝道師。一九七五年より行政マンとして大阪府松原市役所、新潟県高柳町役場、柏崎市役所に勤務。一九八三年から本格的に地域づくりに取り組む。住民と行政による協働活動や住民の生き方、働き方、小さなブランドづくりによる農山村滞在型交流観光プロジェクトで地域活性化や自信と誇りの再生に取り組む。二〇一一年から「荻ノ島集落」の活性化、第二ラウンドに取り組んでいる。